

【正誤表】

頁	行	誤	正
7	18	1962 年	1952 年
45	12	καιρος	καιρός
58	10,11,13	卿	卿
175	29	Predictors/of	Predictors of
175	33	variables/that	variables that

以上、訂正しお詫びいたします。

高校中退予測要因の継時的研究

竹綱誠一郎* 鎌原雅彦** 小方涼子* 高木尋子*** 高梨実****

問題と目的

文部科学省の調査によれば、平成11年度のわが国の高校中退者数は10万6千人に達している。10万人という生徒数は2500学級分、中規模校なら100校分の生徒数に相当する。少子化が進む中、高校生実数が減少しているにもかかわらず、中退者数はむしろ増加傾向にある。

高校中退がいつも問題行動というわけではない。前述の調査によれば、自分の適性に合った別の高校や各種学校へ入学することを中退の理由としてあげているものが、中退者全体の約11%いると述べられている。このような中退行動は積極的な意味を持つ進路変更であり、必ずしも問題行動とは言えない。また、例え高校を卒業しなくても、大学入試資格検定によって大学受験資格を得ることも可能である。大学入試資格検定の受験者も増加傾向にあり、平成13年度から大検は年2回実施されるようになった。現在では、高校中退が必ずしも将来の可能性を閉ざすことにはならなくなっている。

しかしながら、1年間の間に全国で2500学級が消えるという現状は、わが国の中等教育における深刻な問題であることだけは明白である。高校中退の原因は何だろうか。高校中退に関する実態調査は行われているけれども、中退問題そのものを取り扱った心理学的研究は本邦においてはほとんど報告されていない。その原因は、高校中退問題が不登校問題の一側面として取り扱われていることにあると考えられる。竹綱(2002)は、不登校の状態ではないものの、高校1年時に欠席日数の多い生徒群の中から、1年後2年後の中退者が現れやすいことを見出している。このことは、不登校研究の知見が高校中退の問題を考える上で役に立つことを示唆するものである。しかし、不登校研究の主な対象は小学生および中学生であり、高校生の不登校を吟味した心理学的研究がそもそもそう多くないのが現状である。

竹綱ら(1999)および Taketsuna et al. (2000) は、1年間の出席状況データに基づいて生徒を、皆勤群、欠席日数と遅刻日数が平均的な平均的出席群、欠席が多い欠席群、遅刻が多い遅刻群および中退群の5群に分け、判別分析によって各群の心理学的特徴を吟味している。その結果、中退群が欠席群とはかなり異なる特性を持つことが確認された。この知見は、不登校の延長上に中退行動があるわけではないことを示唆するものである。

以上のことから、高校中退予測要因を明らかにするためには、不登校者ではなく高校中退者を対象に研究しなければならないと考えられる。高校中退の原因について吟味した心理学

*学習院大学 **千葉大学 ***伊勢原市教育センター ****都立大島南高校

的研究の大部分は、すでに中退した生徒を対象に、中退理由を尋ねる手続きを採っている。例えば、Seidel & Vaughn (1991) は、1 学年目を完遂した生徒と退学した生徒を対象に調査した。その結果、退学した生徒は学年を完遂した生徒よりもクラスメートから孤立していたことが明らかになった。しかしながら、高校中退後の生徒を被験者として調査する手続きでは、中退者の反応が自らの行動を正当化する方向でずれる危険性がある。このようなバイアスがかからない情報を得るためには、また高校中退の原因を因果関係として論じるためには、生徒が高校を中退する前から調査を開始し、生徒を長期的に追跡する必要があると考えられる。

しかし、中退する生徒が現れる前から生徒を調査対象とし、長期的に追跡調査するという研究手続きを実施することは、現実的には相当難しい。そのため、このような研究計画を実施した研究はわずかしかない。例えば、Cairns et al. (1989)、Janosz et al. (2000)、竹綱ら (1999)、Taketsuna et al. (2000) がこのような手続きで研究を行っている。これらの研究は、中退行動が生じるよりもかなり以前から生徒の追跡調査を開始しており、生徒の当初の心理的要因の測定値が自己正当化というバイアスで汚染されていない点で評価できるものである。また、時間的な流れから、調査開始当初に測定した心理的要因が原因で中退が結果であるという因果関係を明確に出来る点でも有意義な研究である。

竹綱ら (1999) は、1997年4月に高校へ入学した生徒を対象に調査を行った。高校1年時の6月に質問紙を課し、入学動機、性格特性としての統制感、対人関係(友人関係、教師関係および親子関係) および学級への態度などの計15の心理尺度について尋ねた。そして、15変数によって2年生時の中退群と他の生徒群の違いを検討した。Taketsuna et al. (2000) は同じ被験者をさらに1年間追跡し、3年生時の中退群と他の生徒群の違いを同じ15尺度によって吟味した。その結果、中退群が他の生徒群よりも、自己決定感(自分ことは自分で決めるという傾向)が高く、努力因(努力すれば何とかなると考える傾向)が高いということが、2年生時中退群と3年生時中退群に共通して見出された。しかし、2年生時と3年生時で結果がくい違う要因もみられた。例えば、教師関係要因については、2年生時中退群は教師との関係が悪かったのにたいして、3年生時中退群は教師と良好な関係をもっていたことがわかった。このことは、2とおりに解釈することができる。1つは、食い違った結果のとおり、2年生時の高校中退と3年生時の高校中退が質的に異なるという解釈である。もう1つは、入学直後に測定した心理的要因が在学中に変化しているにもかかわらず、最初のデータで2年目、3年目の予測したために、このような違いがでてきたという解釈である。3年間の高校生活の経験が生徒に及ぼす多大な影響を考慮すると、1年生時6月に1度だけ調査を行い、そのデータで3年間を予測するという方法には問題があるかもしれない。

本研究では、入学動機や性格特性のような変動しにくい要因の調査は1度だけとするが、比較的変動しやすい要因については1年生時1学期だけではなく、3学期にも再度調査する

ことにした。このことによって、高校中退を予測すると考えらる要因と中退行動の関係をよりダイナミックにとらえることができると考えた。

方法

(被験者)

1998年4月に公立全日制専門学科高校に入学した生徒202名のうち、留年等の退学以外の事由で学籍名簿から除かれた生徒と質問紙実施時にすでに退学していた生徒の計8名を除き、最終的に194名を調査対象者とした。

(質問紙)

入学動機のように1度測定すれば十分な尺度や、性格特性のように高校在籍中にそう変化しないと考えられる尺度(以下、質問紙Aとよぶ)は、入学直後の4月中に課した。在籍中に変動する可能性がある、友人関係や教師関係、学級の凝集性認知あるいは学業への自信といった尺度(以下、質問紙Bとよぶ)は、生徒が学校に慣れたと判断される6月にまず実施し、さらに3学期の2月にも全く同じ質問紙Bを課した。質問紙Aと質問紙Bは、竹綱ら(1999)のものを使用した。

質問紙Aおよび質問紙Bは高校に留め置くこととし、質問紙調査実施日に欠席した生徒には別の日に回答してもらう手続きにより欠損データを最小にするようにした。

(質問紙A)

入学動機は、以下の3尺度からなる。

- ・目的ある入学(簿記、珠算、情報処理などの資格が取れるから等の4項目)
- ・他者の推薦(中学校の先生に薦められたから等の2項目)
- ・安直な動機(通学が楽だから等の3項目)

統制感は、以下の4尺度からなる。

- ・自己決定感(友人と意見が違っても、自分で決めた行動をとることが多い等の5項目)
- ・努力要因(努力すれば希望する職業につくことができる等の5項目)
- ・運要因(自分の将来は運やチャンスによって決まる等の4項目)
- ・友人関係の統制感(自分の努力次第で友人を作ることができる等の4項目)

(質問紙B)

他者との関係は、以下の3尺度からなる。

- ・親の学校への関心(学校の勉強の内容について親と話すことがある等の8項目)
- ・友人関係(学校で友人と会うのが楽しみだ等の6項目)
- ・教師との関係(先生と話しをするのが楽しい等の11項目)

学校・学級への態度は、以下の2尺度からなる。

- ・学校への満足度(校風が気に入っている等の8項目)

- ・学級の凝集性認知（自分のクラスは楽しい雰囲気である等の8項目）

自信は、以下の3尺度からなる。

- ・学業達成への自信（英語が得意である等の7項目）
- ・友人関係を維持する自信（友人とのトラブルを解決する自信がある等の2項目）
- ・将来への自信（将来、自分の学習したことを生かした職業に就く自信がある等の3項目）

（手続き）

1998年4月に質問紙Aを課した。そして、同年6月に質問紙Bを課した。さらに、1999年2月にもう1度質問紙Bを課した。3年後、2001年3月に卒業した生徒とそれまでに中退した生徒についての情報の提供を受けた。

結果

（群分け）

2001年3月の時点で中退した生徒40名を中退群、卒業した生徒154名を卒業群とした。本研究では何年生時に中退したかということは何問わらず、3年の間に中退したかあるいは卒業したかによって被験者を2群に分けた。

（質問紙Aについて）

質問紙Aで測定した7要因について、t検定によって群間の平均値の差を検定した。分析の結果、目的ある入学に関しては中退群（平均値は3.76）の方が卒業群（平均値は4.07）よりも有意に低かった（ $t=2.16$, $df=183$, $p<.05$ ）。一方、自己決定感に関しては中退群（平均値は1.84）の方が卒業群（平均値は1.69）よりも有意に高い傾向があった（ $t=1.94$, $df=190$, $p<.06$ ）。他の5要因については、群間に有意差はみられなかった。

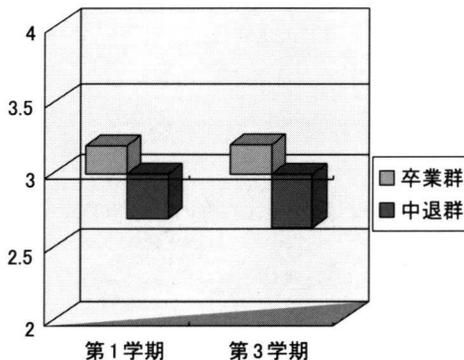


図1. 親の学校への関心

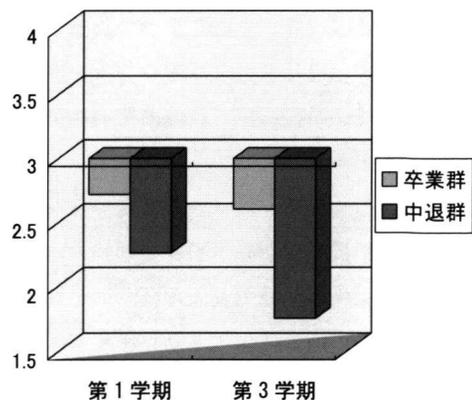


図2. 学校への満足度

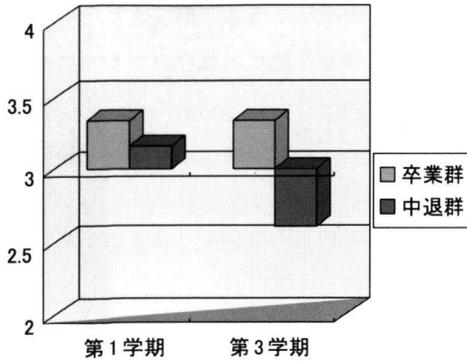


図3. 学級の凝集性

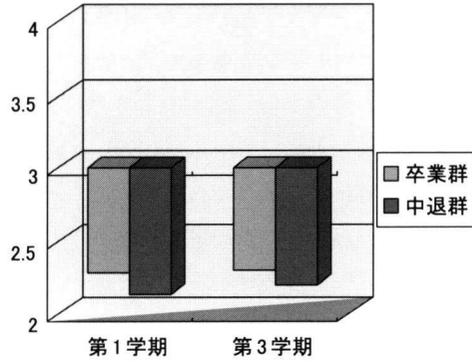


図4. 学業達成への自信

(質問紙 B について)

質問紙 B で測定した 8 要因について、2 (中退群・卒業群) × 2 (1 学期・3 学期) のくりかえしのある 2 要因分散分析を行った。前者は被験者間要因、後者は被験者内要因である。親の学校への関心 (図 1 参照) については、群の主効果に有意差がみられた ($F = 12.1, df = 1/160, p < .01$)。しかし、時期の主効果および群と時期の交互作用には有意差はみられなかった。中退群は卒業群よりも親の学校への関心が低いことがわかった。また、この要因が 1 年を通してあまり変化しないこともわかった。

学校への満足感 (図 2 参照) については、群の主効果 ($F = 9.27, df = 1/153, p < .01$)、時期の主効果 ($F = 16.3, df = 1/153, p < .01$)、両者の交互作用 ($F = 8.99, df = 1/153, p < .01$) に有意差がみられた。中退群は卒業群よりも満足感が低いこと、1 学期よりも 3 学期の方が満足感が低いこと、さらに中退群の方が 3 学期にかけてより低下することが明らかになった。

学級の凝集性 (図 3 参照) については、群の主効果 ($F = 4.49, df = 1/154, p < .05$)、時期の主効果 ($F = 4.79, df = 1/154, p < .05$)、両者の交互作用 ($F = 6.32, df = 1/154, p < .02$) に有意差がみられた。中退群は卒業群よりも学級の凝集性を低く見積っていること、1 学期よりも 3 学期の方が凝集性が高いこと、さらに中退群の方が 3 学期にかけて凝集性認知がさらに低下することが明らかになった。

学業達成への自信 (図 4) については、群の主効果のみに有意差がみられた ($F = 13.4, df = 1.152, p < .01$)。中退群の方が卒業群よりも学業達成への自信が低いことがわかった。

他の 4 変数に関しては、主効果、交互作用とも有意差はみられなかった。

考察

(質問紙 A によって測定した要因について)

中退群は卒業群よりも目的ある入学の得点が高く、自己決定感が高かった。自己決定感に関しては、竹綱ら (1999) と Taketsuna et al. (2000) の結果に合致するものであった。この

結果は自己決定感の高い生徒は困難に直面しても動機づけを維持することができるという知見 (Deci 1980) に反するものである。しかし、中退群の生徒の自己決定感得点が有意に高いとはいうものの平均1.84点であり、尺度の中央値 (3点) よりはかなり低いものであった。本研究の被験者は、竹綱ら (1999) と同じ高校の異なる年度入学の生徒であった。全体的な自己決定感得点の低さからみて、この結果はこの学校独自のものであるとも考えられる。自己決定感の高い生徒が中退するという結果が一般化できるものであるかどうかを確かめるため、さらに別の高校でデータを収集する必要があるだろう。

目的ある入学については、竹綱ら (1999) の2年生時中退の結果とは合致するものの、Taketuna et al. (2000) の3年生時中退の結果とは異なっていた。本研究の中退群には2年生時中退者と3年生時中退者が混在していたためにこのような結果になったと考えられる。

(質問紙 B によって測定した要因について)

本研究は、1年生時6月と2月に質問紙調査を繰り返すことによって、中退予測要因の変動を加味して、中退者を予測しようとした。調査を繰り返すことの効果が最もよくあらわれたのは、図2学校への満足度と図3学級の凝集性認知であった。図2から、中退群の生徒の学校満足度が時間の経過と共に低下していることがわかる。また、図3から、中退群の生徒は学級の凝集性認知がプラスからマイナス方向へ低下していくことがわかった。本研究の手続きは、6月に1度だけ測定するという手続きよりも、中退者を予測する精度をかなり上げていると考えられる。入学後も定期的に調査を実施し、時間経過に伴って学校への満足度が下がる生徒や、学級のまとまりが弱くなっていると考える生徒を発見することによって、教師が介入を行う適切なタイミングを見出すことができるかもしれない。

卒業群は親の学校への関心が高かった (図1)。これは竹綱ら (1999) の知見や竹綱 (2001) の指摘に合致するものである。また、図1からこの要因は半年ほどの時間経過ではほとんど変動しないことがわかった。このことから、家庭雰囲気あるいは家庭教育が、生徒の学校適応に重要な役割を果たすことが示唆された。

学業達成への自信のなさが中退につながるものが、図4からわかった。この要因は不登校の原因として、しばしば指摘されるものである (例えば、大日方 (1999) は高校生の不登校の前兆について述べる中で、小学生・中学生・高校生に共通したものとして学力不振を挙げている)。

将来の中退者が1年時のうちに学校への満足感や学級の凝集性認知を低下させていたことは興味深い結果であった。これまでの研究では、中退予測要因のこのようなダイナミックな変化をとらえられなかった。予測要因の変化によって中退行動を予測する精度をさらに高めるためには、1年生時に繰り返すだけでなく、2年生時にもさらに3年生時にも質問紙調査を繰り返す必要があるだろう。また、この予測モデルを一般化するためには、多様な高校において同様の継時的研究を行う必要があるだろう。

引用文献

- Cairns, R. B., Cairns, B. D., & Neckerman, H. J. 1989 Early school dropout : Configuration and determinants. *Child Development*, 60, 1437-1452.
- Deci, E. 1980 *The psychology of self-determination* D. C. Health & Company (石田梅男訳 1985 自己決定の心理学 誠信書房)
- Janosz, M., LeBlanc, M., Boulerice, B., & Tremblay, R. E. 2000 Predicting different types of school dropout: A typological approach with two longitudinal samples. *Journal of Educational Psychology*, 92, 171-190.
- 文部科学省 2001 平成11年度における公・私立高等学校における中途退学者の状況
- Seidel, J.F., & Vaughn, S. 1991 Social alienation and the learning disabled school dropout. *Learning Disability Research & Practice*, 6, 152-157.
- 竹網誠一郎 2001 高校中途退学者に関する3年間の追跡的研究 学習院大学文学部研究年報、48, 261-277.
- Taketsuna, S., Kambara, M., Ogata, R., Takagi, H., & Takanashi, M. 2000 *A longitudinal study on dropout in a senior high school in Japan*. Paper presented at the meeting of 27th International Congress of Psychology (Stockholm, Sweden)
- 竹網誠一郎・高梨実・鎌原雅彦・小方涼子・高木尋子 1999 高校生の学校適応に関する研究(2)、学習院大学計算機センター年報、20, 38-42.

高校中退予測要因の継時的研究

竹網誠一郎 鎌原雅彦 小方涼子 高木尋子 高梨実

本研究の目的は、高校中退を予測すると考えられる認知的要因と動機づけ要因を継時的に測定することによって、高校中退の原因を検討することである。高校1年生194名を対象に、卒業までの3年間、追跡調査を行った。1年生時4月に質問紙を課し、入学動機や動機づけ特性など比較的可変しにくい認知的・動機づけ的要因を測定した。学校への満足度や対人関係といった比較的可変しやすい認知的・動機づけ的要因については、1年生時6月と翌年2月に同じ質問紙をくりかえし課すことによって測定した。3年間の間に高校を中退した中退群(40名)と卒業した卒業群(154名)を各変数について比較したところ、中退群は卒業群よりも(1)親の学校への関心が低く、(2)学校への満足感が低く、(3)学級の凝集性認知が低いことがわかった。また、中退群は、6月から2月にかけて、学校への満足感と学級の凝集性認知がさらに低下していることが明らかになった。

キーワード【高校中退 継時的研究 親の学校への関心 動機づけ】

A Successive Study on Predictors / of Dropouts from High School

Seiichiro TAKETSUNA Masahiko KAMBARA Ryoko OGATA

Hiroko TAKAGI and Minoru TAKANASHI

This article describes the cognitive and motivational variables / that would have predictive value for school dropouts. The subjects were 194 students in a commercial high school. Two

questionnaires measuring the cognitive and motivational variables were administered at the beginning of the first academic year. And again, one of two questionnaires was assigned to students around the end of the first academic year. In the following three years, forty students left school without completing their studies. We tested the differences in cognitive and motivational variables between the dropout group and the completion group. Results showed that students in the dropout group were lower than those of the completion group on parent's concern with school, satisfaction with school, and group cohesion in class. Students of the dropout group went from low to lower in a year on satisfaction with school and group cohesion in class.

Key words: dropout, successive study, parent's concern with school, motivational variables